

総合学習が目ざすもの

森 敏昭

1. 総合学習の光と陰

前回までに筆者が主張してきたことは、次の3点に要約することができる。

(1)学力低下に歯止めをかけるためには、基礎学力重視と自己教育力重視という2つの学力観の排他的対立を超克し、両者を有機的に統合した第3の学力観に基づいて教育改革を行うべきである。(2)そのためには学校を「真の学び」がなされる場所として蘇(よみがえ)らせることが重要であり、(3)その「真の学び」は赤・青・黄の3色の糸で編み上げるべきである。

新教育課程で創設された「総合的な学習の時間(総合学習)」の目ざしているものが、おそらくその「真の学び」と言えるだろう。しかし、総合学習に対する教育現場の反応は、あまり芳しくない。筆者の耳に届いてくる教育現場の先生がたの声は、概(おおむ)ね否定的である。例えば「総合学習では子どもたちが何を学んでいるのかわからない」といった、否定的なニュアンスであることが多い。時には、「総合学習はいつなくなるのですか?」と、まだ始まったばかりだというのに、もうなくなることを期待しているかのような質問を受けて愕然(がくぜん)としたこともある。加えて、「総合学習は学力低下に拍車をかける」という学力低下論者の大々的なキャンペーンも、総合学習の未来に色濃く「陰」を落としているようである。

こんなことでは、学力低下論者の予言通り、本当に「お祭り騒ぎのイベントが終わってみ

れば、後は学力低下が残っただけ」ということになってしまうのではないだろうか。できることなら、教育改革を先導する「光」になることを目ざして始まった総合学習が、そんな惨めな終焉(しゅうえん)を迎えてほしくないものである。では、そうしないために、総合学習は具体的にはどのように計画・実施されるべきなのだろうか。それを説明するために、ここで総合学習の先進国であるアメリカの授業実践例を紹介してみよう。

2. ハーブ・ジョンソン先生の総合学習

ハーブ・ジョンソン先生の勤務先であるモンロー中学校は、アメリカではよい学校の部類に入る。標準学力テストの成績は概ね良好であり、学級は小規模で、建物・設備もよく維持管理されている。校長の指導力も確かであり、教職員の異動も少ない。このため毎年、ジョンソン先生の授業を受けさせるために、わざわざ別の地域の小学校から子どもを転入させてくる保護者がいるくらいである。では、「ジョンソン先生の授業は絶品だ」という評判は、いったいどこから生まれるのだろうか?

新学期の第1週目、ジョンソン先生は自分が担任をしている6年生に、「自分についてどんな疑問を持っているか」「世の中のことで何が知りたいか」という2つの質問をする。すると生徒たちは、各自の疑問を挙げ始める。そのとき生徒が、「こういう疑問はくだらない、とるに足らない疑問かな?」と尋ねるこ

ともある。そのようなとき、ジョンソン先生は、「自分が本当にその答えを知りたいと思っているのなら、その疑問はくだらないことでも、つまらないことでもないですよ」と答える。ジョンソン先生は、生徒たちが各自の疑問のリストを作った後、そのリストに基づいて生徒をいくつかの小グループに分け、生徒たちが疑問を共有し探索し合えるようにする。生徒たちは、グループごとに十分な話し合いをした後に、「自分についての疑問」と「世の中のことについての疑問」のそれぞれについて、疑問の優先順位のリストを作り上げる。

その後、全体でのセッションに戻り、ジョンソン先生は各グループの優先事項を出させ、疑問のリストの優先順位について、クラス全体で合意が得られるように働きかける。このようにして順位づけされた疑問のリストが、ジョンソン先生の授業を導くガイドラインになる。例えば「私は100歳まで生きられるかしら？」という疑問から、遺伝学や、家族史、口承歴史資料、推計学、統計、確率、心疾患、癌(がん)、高血圧など幅広い分野にわたる調べ学習が始まることになるのである。

その際、生徒たちは、教師はもちろんのこと、家族や友人、さまざまな分野の専門家、インターネットのホームページ、書籍など多様な情報源を探索する。「このとき生徒が取り組まねばならないのは『学びの共同体』の一員となっていくことでした」と、ジョンソン先生は述懐する。

ジョンソン先生によれば、生徒たちは「どのような問題が知的好奇心をかき立てる問題なのかを自分たちで判断し、自分たちでその問題を調べる方法を工夫し、学びの旅に出かける。時にはゴールにたどり着けないこともあるし、無事にたどり着けることもある。しかし、大抵の場合、当初の目標をはるかに超え、最初に予想していた以上に多くのことを学んでいる」のである。

この調べ学習の最終段階では、ジョンソン先生と生徒たちがいっしょになって、皆で調べたことが従来の教科内容の範囲とどのように関連しているかを照らし合わせる。そして、国語、数学、理科、社会、歴史、音楽、美術などの教科内容と、自分たちの経験とを照合したチャートを作成していく。そのとき生徒たちは、自分たちがどれだけ多くのことを学び、それがどれだけ多様なものであったかを知って驚くことが多い。例えば、「ただおもしろいことをやっていただけなのに、こんなにたくさんを勉強していたなんて、ちょっと気づかなかったよ！」という生徒がいるのである。

このように、ジョンソン先生の授業は、あらかじめ決められた指導案からではなく、生徒たちの疑問から出発する。この生徒たちの疑問が「赤い糸」である。この赤い糸を、ジョンソン先生はクラスでの話し合いや協同の調べ学習を通して「黄の糸」と縊(よ)り合わせる。「生徒が取り組まねばならないのは『学びの共同体』の一員となっていくことでした」というジョンソン先生のことばは、正にそのことを指している。そしてジョンソン先生は最後に、赤と黄の糸を「青い糸」に繋(つな)げる。すなわち、調べ学習で学んだ具体的体験を抽象化・一般化された教科学習と繋げるのである。

筆者が見聞した日本の総合学習の場合、この最終段階が不十分であることが多い。そのため総合学習と教科学習が繋がらず、そのことが前述の「総合学習では子どもたちが何を学んでいるのかわからない」といった否定的な反応を生じさせるのである。繰り返しになるが、総合学習は赤・青・黄の3色の糸で編み上げることが大切である。3色のうちのどの色が欠けても、総合学習は決して「真の学び」にはならないであろう。

(もり・としあき=広島大学大学院教授)